

小・中連携で行うキャリア教育の実践

～地域と共に歩む体験活動～

美祢市立：於福中学校、於福小学校

キャリア教育の観点

於福中学校区では、地域の特性、人材、環境を活用した体験活動を行う中で、学校では経験できない特別な場所での体験と、その事前指導・事後指導を充実させ自分自身を振り返らせることで、自分でできることを考えさせる活動を行っています。また、この取組を通じて、自らを律しつつ、他者とともに協調し、相手を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性を育み、人間関係形成・社会形成能力を育成することもねらっています。

【人間関係形成・社会形成能力】

地域と共に歩む体験活動

於福中学校区には、校区内居住、出身の河内美舟氏創設による、ケアグループ「同朋の友」の施設がある。特別養護老人ホームみのり園、指定障害者施設あそかの園、有料老人ホームめぐみの園等、支援や介護を必要とする方々への施設である。

これらの施設へは、徒歩で移動でき、地域に根差した施設であることから、高齢者とのふれ合いを通して、豊かな体験を積むことができる。ふれあい（体験）、学び合い（共感）、助け合い（参加）へと意識を発展させ、将来にわたって「ふるさと於福」への熱い心を抱き続ける子どもを育むことができる。

各校の体験活動

於福小学校3・4年生

10月、めぐみの園で開催される、運動会に参加。子どもも入居者も赤白に分かれて、元気の良い声が園に響き渡る。一生懸命に応援する姿に感動。入所者の方とのふれ合いを通して、お年寄りの方が喜んでもらうために「自分ができること」を考える。



於福小学校5・6年生

6月、めぐみの園を訪問。今回は入所の方々や、職員の方々へのインタビューを行う。お年寄りの方へ尋ねることの難しさを知る。

職員の方々からは日々気をつけておられることや、施設の工夫などについて、学んだ。



於福中学校1年生

毎年夏季休業中に半日の日程で、1年生全員がみのり園で福祉体験学習を行っている。車いす体験やお年寄りの方とのふれあい、施設見学など、特別養護老人ホームでのお年寄りの生活の様子から、自分たちができることを考えさせている。



於福中学校2年生

美祢市内を中心に、2日間の職場体験学習を行っている。それぞれの職場で体験をし、実際にお客さんとふれあったり、仕事を行ったりする中で、将来の自分を見つめる機会となっている。自分で職場まで行き、自分で帰ってくることもよい経験である。



小・中の連携、接続

現在、具体的に両校の行事としてオープンスクールや校内研修を相互に乗り入れ、さらに、数学、保健体育、理科で小・中の教員がTTという形で授業を行っている。

接続という点で見れば、同じ地域にある学校同士なので、体験活動や地域の方々をお招きして何らかの指導をして頂くにあたり、同じ場所で体験を行ったり、同じ方をお招きしたりする機会が多くある。小学校では、ふれあいという観点からの訪問であるが、中学校では、職場や働く人という観点で訪問していることで、小・中のスムーズな接続になっていると考える。

その他の体験活動

於福小学校 森林教育活動

①学校裏にある「わんぱく山」を活用し、四季折々の動植物の観察や、「森」の素材を利用した、様々な楽しみ方を体験させ、森林・林業に対する関心を深める。②自然や森林に関する知識を深め、自然や動植物を愛し、生命を尊重する豊かな心情を育てる。この目標を掲げ、詳しいお二人の講師の方にお越し頂き、学習が展開されている。



於福小学校 1・2年生 高齢者の方とのふれ合い

2学期、地域の方々、見守り隊の方々、おじいちゃん、おばあちゃんに学校にお集まり頂き、「コレカラクラブ」として、伝承遊びをいっしょに楽しんでいる。ゲーム機やカード遊びの流行る頃であるが、昔から伝わる遊びはとても新鮮に子ども達には受け入れられているようである。高齢者の皆さんも孫(年齢)とのふれ合いを喜んでおられる。



於福中学校 修学旅行

今年度も修学旅行を実施する前に、「まるごと！やまぐち料理教室」を本校で開催し、山口県調理師団体連合会会長の鴛海貞夫様を講師としてお招きした。これは、まず山口県産の鰹を使った調理を一緒に体験させて頂き、その後修学旅行で鰹料理の本場京都に行き、京都の鰹の調理法を見せて頂くという、地元山口と京都とのつながりや比較を意図したものであった。「まるごと！やまぐち料理教室」では、生徒たちと一緒に調理をして頂いたのが美祢市のヘルスマイトの方々である。

このように、修学旅行という行事一つにも様々な地元の方々の協力を仰ぎ、生徒たちに多種多様な体験活動をさせることで、将来への一助となるよう取り組んでいる。

写真は、左がヘルスマイトの方と一緒に鰹料理に取り組んでいる様子で、中が宿泊したホテルで料理長の方に鰹料理を見せて頂いているところ、右がおいしくいただいているところである。

